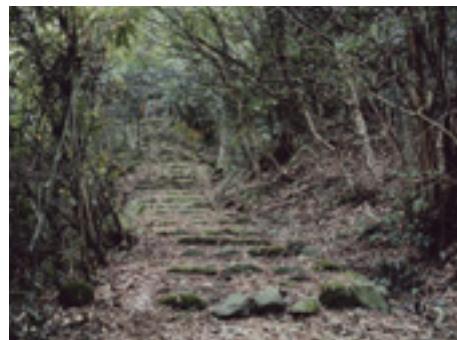




「石見銀山遺跡とその文化的景観」



観世音寺から大森町並み



温泉津沖泊道

かつて東アジアの社会に大きな影響を与えた石見銀山。2007年に日本で14番目の世界遺産として登録された石見銀山ですが、登録されたのは鉱山の跡だけではないということをご存知ですか？

実は石見銀山遺跡は、鉱山跡だけではなく鉱山とともに発展した鉱山町、銀を運ぶのに使われた街道、銀を積み出した港とそれを支えた港町など、多くの場所から構成されており、それらも世界遺産に登録されています。

ところが、鉱山というどうしても鉱石を掘り出した坑道のイメージが強いため、一般的には石見銀山＝坑道跡と思われるようです。実際、石見銀山を訪れる方の多くは、公開されている龍源寺間歩^{りゅうげんじまぶ}という坑道を目的にやってきて、それを見るだけで帰ってしまっています。もちろん、それが悪いということではないのですが、これでは残念ながら世界遺産「石見銀山とその文化的景観」を見たことにはなりません。

石見銀山が世界遺産となった理由の一つには、鉱山跡のみならずそれと密接に関わる鉱山町・街道・城跡・港・港町などの場所が残り、全体として当時の鉱山運営のあり方を良く表している、ということがあります。そうした点からすると、全体を見ることにより理解の深まる遺産だということが言えます。

これらの場所を歩いてみると、銀生産が盛んだった

頃の痕跡があちこちに残っていることが分かります。目を見張るようなものはほとんどと言っていいくらいありませんが、それでも確実に訪れる人に語りかけてくれます。

当時の面影を残す町並みをゆっくり歩くのもよし、銀を運んだ街道を歩いて人々の苦勞に思いを馳せるのもよし、港に立って銀が船で運ばれている情景を思い描くのもよし、それぞれの楽しみ方がありますので、一つずつ体験して石見銀山の真の魅力に迫ってみてはいかがでしょうか。

世界遺産に登録されたところには歴史のある温泉もありますので、それを楽しむのもいいかもしれませんね。
(協力/島根県東京事務所)

